

第4次総合発展計画 長期構想の柱建て	左記柱建てに関連する主な意見	
	第1回有識者懇談会	第2回有識者懇談会
<p>政策の柱1：次代を担い地域を支える人材の育成・確保</p>		
<p>政策1：学校教育の充実</p> <p>特に、施策3「社会の変化に対応して自立する力を伸ばす教育の充実」、施策5「特別なニーズに対応した教育等の充実」に関連する意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> 山形県の4地域は、それぞれ特性がある。各地の食文化、祈りの文化、民話、方言、自然、地形、最上川の歴史、樹氷など、山形にしかない、山形県ならではの文化、歴史、自然を、現代の生活につなげて紹介することで身近に感じ魅力になる。 資料を蓄積していくことにより何かを生み出していく学術的な専門家の視点が必要。 	<ul style="list-style-type: none"> その時代に応じたものが展示できるような自由な部屋があると面白い。 様々な企画に挑戦できる実験場的な場所やプログラム、一回試しにやってみる機能があるとよいのではないか。それをデジタルで実現することもよい。 住民の学べる場づくりなど、コミュニティの参加や誰でも活用できるような配慮が必要。 インクルーシブな視点が重要であり、誰にでも利用しやすい博物館を目指す必要がある。そのためには、施設面での問題と人間でケアできる問題を分けて検討する必要がある。 障がいデザインの方で解決するインクルーシブな博物館、“見る”だけでなく“感じる”“触れる”博物館を目指してほしい。障がい者福祉にもつながる。
<p>政策2：生涯を通じた多様な学びの機会の充実</p> <p>特に、施策1「産業界や地域のニーズを踏まえた社会人の学び直しの促進」、施策2「県民や地域に活力をもたらす多様な学びの促進」に関連する意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> 山形県の4地域は、それぞれ特性がある。各地の食文化、祈りの文化、民話、方言、自然、地形、最上川の歴史、樹氷など、山形にしかない、山形県ならではの文化、歴史、自然を、現代の生活につなげて紹介することで身近に感じ魅力になる。 資料を蓄積していくことにより何かを生み出していく学術的な専門家の視点が必要。 「普遍的な価値」があるものをブラッシュアップし、なぜそれが大事なのか、残していかなければいけないのか考えるきっかけをつくることにより、郷土への愛着につながる。 今にもなくなってしまいそうな文化がたくさんある。それらをリスト化し残していくことはとても大事なことです。 社会が変わっていく中で、博物館が収集している変わらないもの(リアル)に大きな価値が生まれる。変わらないものへの安心感が、人が集まるということに繋がるのではないか。 その土地の人々の暮らしと関連したもの、風土を作ってきたものには魅力があり、その魅力は観光誘客にもつながる。 博物館の内容だけではなく、交通政策、観光政策も含めた広い視点で考える必要がある。周辺の商業施設や地域企業との連携により経済効果を高めることが重要である。 例えば、食文化や歴史を紹介する展示企画と関連づけて、在来野菜を買ったり、郷土料理を食べられる施設があると、収蔵資料の理解が深まり、展示企画からの誘導もでき、集客につながる。 博物館の収益性が担保できることで、地域、子ども達、文化財の保存・修復にも還元できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 住民の学べる場づくりなど、コミュニティの参加や誰でも活用できるような配慮が必要。 その時代に応じたものが展示できるような自由な部屋があると面白い。 様々な企画に挑戦できる実験場的な場所やプログラム、一回試しにやってみる機能があるとよいのではないか。それをデジタルで実現することもよい。 博物館の魅力伝える基礎となる研究機能が重要であり、研究機関として位置づけることが重要。 博物館の資料を研究対象として考えられるように、いろいろな方がアクセスしやすいようにすると、直接研究したり、山形での暮らしを考えたり、研究職を求めたりすることにも繋がる。 リアルだけでなくデジタルでもアクセスできるということが重要。様々な地域や世界、時代を超えてアクセスができる事が興味関心に繋がる。また、アクセスしやすいということをオープンにわかりやすく発信していくことが必要。 博物館は「ヒト」が作っていくものであり、学芸員の研究環境の整備も含めた人材育成のあり方や大学等との高度人材の共有などについて議論が必要。 学芸員にスポットを当てて発信していく事も面白い。熱量が高く、興味深い話をしてくれる方がいる。学芸員のトークバトルなどを見てみたい。 高度な人材を社会の様々なところで共有していくという考え方がある。大学教授やデザイナーなどを一部共有していく柔軟な発想もある。 これからは横の連携が必要になる。博物館の目的に、教育、研究、楽しみなどがあり、これらは観光、移住に繋がっていく。 県民になじみのある場所にするためのゆるキャラ、愛称など民間のブランディング手法も必要。 関係人口を増やし、来館者データを集め、意見やアドバイスをいただく事が大事。 利用者の足跡、効果をストックしていくが大事。そうすることで、教育現場、高齢者など分野、年代、地域で求められていることが分かるのではないか。
<p>政策3：若者の定着・回帰の促進</p> <p>特に、施策1「子どもの頃からの地域への愛着や理解の醸成」に関連する意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> 山形県の4地域は、それぞれ特性がある。各地の食文化、祈りの文化、民話、方言、自然、地形、最上川の歴史、樹氷など、山形にしかない、山形県ならではの文化、歴史、自然を、現代の生活につなげて紹介することで身近に感じ魅力になる。 資料を蓄積していくことにより何かを生み出していく学術的な専門家の視点が必要。 「普遍的な価値」があるものをブラッシュアップし、なぜそれが大事なのか、残していかなければいけないのか考えるきっかけをつくることにより、郷土への愛着につながる。 今にもなくなってしまいそうな文化がたくさんある。それらをリスト化し残していくことはとても大事なことです。 社会が変わっていく中で、博物館が収集している変わらないもの(リアル)に大きな価値が生まれる。変わらないものへの安心感が、人が集まるということに繋がるのではないか。 その土地の人々の暮らしと関連したもの、風土を作ってきたものには魅力があり、その魅力は観光誘客にもつながる。 博物館の内容だけではなく、交通政策、観光政策も含めた広い視点で考える必要がある。周辺の商業施設や地域企業との連携により経済効果を高めることが重要である。 例えば、食文化や歴史を紹介する展示企画と関連づけて、在来野菜を買ったり、郷土料理を食べられる施設があると、収蔵資料の理解が深まり、展示企画からの誘導もでき、集客につながる。 博物館の収益性が担保できることで、地域、子ども達、文化財の保存・修復にも還元できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 住民の学べる場づくりなど、コミュニティの参加や誰でも活用できるような配慮が必要。 その時代に応じたものが展示できるような自由な部屋があると面白い。 様々な企画に挑戦できる実験場的な場所やプログラム、一回試しにやってみる機能があるとよいのではないか。それをデジタルで実現することもよい。 博物館の魅力伝える基礎となる研究機能が重要であり、研究機関として位置づけることが重要。 博物館の資料を研究対象として考えられるように、いろいろな方がアクセスしやすいようにすると、直接研究したり、山形での暮らしを考えたり、研究職を求めたりすることにも繋がる。 リアルだけでなくデジタルでもアクセスできるということが重要。様々な地域や世界、時代を超えてアクセスができる事が興味関心に繋がる。また、アクセスしやすいということをオープンにわかりやすく発信していくことが必要。 これからは横の連携が必要になる。博物館の目的に、教育、研究、楽しみなどがあり、これらは観光、移住に繋がっていく。 博物館で全てを担うのではなく、県産業科学館など既にある施設と機能を分担する形もある。 地域、産業、自治体同士など、さまざまな立場の連携がある。何のために連携するのか、目的がはっきりしていないと連携のための連携になってしまいうまいかない。 ファンの入口を掴むのが大事。寄附の窓口を作り、クラウドファンディングやボランティアなど、支えの仕組みを作る。支え手と博物館の関係性をどんどん濃くしていくのが良い。 県民になじみのある場所にするためのゆるキャラ、愛称など民間のブランディング手法も必要。 関係人口を増やし、来館者データを集め、意見やアドバイスをいただく事が大事。 利用者の足跡、効果をストックしていくが大事。そうすることで、教育現場、高齢者など分野、年代、地域で求められていることが分かるのではないか。
<p>政策4：国内外の様々な人材の呼び込み</p> <p>特に、施策1「多様なライフスタイルの提案・発信」、施策3「関係人口の創出・拡大」に関連する意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> 山形県の4地域は、それぞれ特性がある。各地の食文化、祈りの文化、民話、方言、自然、地形、最上川の歴史、樹氷など、山形にしかない、山形県ならではの文化、歴史、自然を、現代の生活につなげて紹介することで身近に感じ魅力になる。 資料を蓄積していくことにより何かを生み出していく学術的な専門家の視点が必要。 「普遍的な価値」があるものをブラッシュアップし、なぜそれが大事なのか、残していかなければいけないのか考えるきっかけをつくることにより、郷土への愛着につながる。 今にもなくなってしまいそうな文化がたくさんある。それらをリスト化し残していくことはとても大事なことです。 社会が変わっていく中で、博物館が収集している変わらないもの(リアル)に大きな価値が生まれる。変わらないものへの安心感が、人が集まるということに繋がるのではないか。 その土地の人々の暮らしと関連したもの、風土を作ってきたものには魅力があり、その魅力は観光誘客にもつながる。 博物館の内容だけではなく、交通政策、観光政策も含めた広い視点で考える必要がある。周辺の商業施設や地域企業との連携により経済効果を高めることが重要である。 例えば、食文化や歴史を紹介する展示企画と関連づけて、在来野菜を買ったり、郷土料理を食べられる施設があると、収蔵資料の理解が深まり、展示企画からの誘導もでき、集客につながる。 博物館の収益性が担保できることで、地域、子ども達、文化財の保存・修復にも還元できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 住民の学べる場づくりなど、コミュニティの参加や誰でも活用できるような配慮が必要。 その時代に応じたものが展示できるような自由な部屋があると面白い。 様々な企画に挑戦できる実験場的な場所やプログラム、一回試しにやってみる機能があるとよいのではないか。それをデジタルで実現することもよい。 博物館の魅力伝える基礎となる研究機能が重要であり、研究機関として位置づけることが重要。 博物館の資料を研究対象として考えられるように、いろいろな方がアクセスしやすいようにすると、直接研究したり、山形での暮らしを考えたり、研究職を求めたりすることにも繋がる。 リアルだけでなくデジタルでもアクセスできるということが重要。様々な地域や世界、時代を超えてアクセスができる事が興味関心に繋がる。また、アクセスしやすいということをオープンにわかりやすく発信していくことが必要。 これからは横の連携が必要になる。博物館の目的に、教育、研究、楽しみなどがあり、これらは観光、移住に繋がっていく。 博物館で全てを担うのではなく、県産業科学館など既にある施設と機能を分担する形もある。 地域、産業、自治体同士など、さまざまな立場の連携がある。何のために連携するのか、目的がはっきりしていないと連携のための連携になってしまいうまいかない。 ファンの入口を掴むのが大事。寄附の窓口を作り、クラウドファンディングやボランティアなど、支えの仕組みを作る。支え手と博物館の関係性をどんどん濃くしていくのが良い。 県民になじみのある場所にするためのゆるキャラ、愛称など民間のブランディング手法も必要。 関係人口を増やし、来館者データを集め、意見やアドバイスをいただく事が大事。 利用者の足跡、効果をストックしていくが大事。そうすることで、教育現場、高齢者など分野、年代、地域で求められていることが分かるのではないか。
<p>政策の柱2：競争力のある力強い農林水産業の振興・活性化</p>		
<p>政策1：やまがたの農業を支える人材の育成と基盤形成</p> <p>特に、施策1「多様な担い手の確保」に関連する意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> 山形県の4地域は、それぞれ特性がある。各地の食文化、祈りの文化、民話、方言、自然、地形、最上川の歴史、樹氷など、山形にしかない、山形県ならではの文化、歴史、自然を、現代の生活につなげて紹介することで身近に感じ魅力になる。 資料を蓄積していくことにより何かを生み出していく学術的な専門家の視点が必要。 「普遍的な価値」があるものをブラッシュアップし、なぜそれが大事なのか、残していかなければいけないのか考えるきっかけをつくることにより、郷土への愛着につながる。 今にもなくなってしまいそうな文化がたくさんある。それらをリスト化し残していくことはとても大事なことです。 社会が変わっていく中で、博物館が収集している変わらないもの(リアル)に大きな価値が生まれる。変わらないものへの安心感が、人が集まるということに繋がるのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> 食文化や風習など、将来に残したい情報を伝えるため、おばあちゃんの手仕事などを見ることができる自由な部屋をつくと、様々な人がきて、後継者育成などにもつながるのではないか。
<p>政策2：収益性の高い農業の展開</p> <p>特に、施策4「6次産業化の展開などによる付加価値の向上」に関連する意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> 山形県の4地域は、それぞれ特性がある。各地の食文化、祈りの文化、民話、方言、自然、地形、最上川の歴史、樹氷など、山形にしかない、山形県ならではの文化、歴史、自然を、現代の生活につなげて紹介することで身近に感じ魅力になる。 資料を蓄積していくことにより何かを生み出していく学術的な専門家の視点が必要。 その土地の人々の暮らしと関連したもの、風土を作ってきたものには魅力があり、その魅力は観光誘客にもつながる。 博物館の内容だけではなく、交通政策、観光政策も含めた広い視点で考える必要がある。周辺の商業施設や地域企業との連携により経済効果を高めることが重要である。 例えば、食文化や歴史を紹介する展示企画と関連づけて、在来野菜を買ったり、郷土料理を食べられる施設があると、収蔵資料の理解が深まり、展示企画からの誘導もでき、集客につながる。 博物館の収益性が担保できることで、地域、子ども達、文化財の保存・修復にも還元できる。 	
<p>政策3：「やまがた森林ノミクス」の加速化</p>		
<p>政策4：付加価値の高い水産業の振興</p>		
<p>政策の柱3：高い付加価値を創出する産業経済の振興・活性化</p>		
<p>政策1：IoTなどの先端技術の活用等による産業イノベーションの創出</p>		
<p>政策2：地域産業の振興・活性化と中小企業等の成長・発展</p>		
<p>政策3：国内外からの観光・交流の拡大による地域経済の活性化</p> <p>特に、施策1「観光地域づくりの推進」に関連する意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> 山形県の4地域は、それぞれ特性がある。各地の食文化、祈りの文化、民話、方言、自然、地形、最上川の歴史、樹氷など、山形にしかない、山形県ならではの文化、歴史、自然を、現代の生活につなげて紹介することで身近に感じ魅力になる。 資料を蓄積していくことにより何かを生み出していく学術的な専門家の視点が必要。 その土地の人々の暮らしと関連したもの、風土を作ってきたものには魅力があり、その魅力は観光誘客にもつながる。 博物館の内容だけではなく、交通政策、観光政策も含めた広い視点で考える必要がある。周辺の商業施設や地域企業との連携により経済効果を高めることが重要である。 例えば、食文化や歴史を紹介する展示企画と関連づけて、在来野菜を買ったり、郷土料理を食べられる施設があると、収蔵資料の理解が深まり、展示企画からの誘導もでき、集客につながる。 博物館の収益性が担保できることで、地域、子ども達、文化財の保存・修復にも還元できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 博物館の資料を研究対象として考えられるように、いろいろな方がアクセスしやすいようにすると、直接研究したり、山形での暮らしを考えたり、研究職を求めたりすることにも繋がる。 リアルだけでなくデジタルでもアクセスできるということが重要。様々な地域や世界、時代を超えてアクセスができる事が興味関心に繋がる。また、アクセスしやすいということをオープンにわかりやすく発信していくことが必要。 これからは横の連携が必要になる。博物館の目的に、教育、研究、楽しみなどがあり、これらは観光、移住に繋がっていく。 博物館で全てを担うのではなく、県産業科学館など既にある施設と機能を分担する形もある。 地域、産業、自治体同士など、さまざまな立場の連携がある。何のために連携するのか、目的がはっきりしていないと連携のための連携になってしまいうまいかない。 ファンの入口を掴むのが大事。寄附の窓口を作り、クラウドファンディングやボランティアなど、支えの仕組みを作る。支え手と博物館の関係性をどんどん濃くしていくのが良い。 県民になじみのある場所にするためのゆるキャラ、愛称など民間のブランディング手法も必要。 関係人口を増やし、来館者データを集め、意見やアドバイスをいただく事が大事。 利用者の足跡、効果をストックしていくが大事。そうすることで、教育現場、高齢者など分野、年代、地域で求められていることが分かるのではないか。

第4次総合発展計画 長期構想の柱建て	左記柱建てに関連する主な意見	
	第1回有識者懇談会	第2回有識者懇談会
政策の柱4: 県民が安全・安心を実感し、総活躍できる社会づくり		
<p>政策1: 大規模災害への対応など危機管理機能の充実強化</p> <p>特に、施策2「自助・共助による地域防災力の向上」に関連する意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> 山形県の4地域は、それぞれ特性がある。各地の食文化、祈りの文化、民話、方言、自然、地形、最上川の歴史、樹氷など、山形にしかない、山形県ならではの文化、歴史、自然を、現代の生活につなげて紹介することで身近に感じ魅力になる。 資料を蓄積していくことにより何かを生み出していく学術的な専門家の視点が必要。 	<ul style="list-style-type: none"> 地形や地質の遺産を中心とした景観であるジオパークとの連携ができれば面白い。宮城県には、ジオパークである三陸の国立公園に震災の遺構があり、災害の啓発や防災に役立てることが出来る。
政策2: 暮らしの様々なリスクへの対応力の強化		
政策3: 保健・医療・福祉の連携による「健康長寿日本一」の実現		
<p>政策4: 多様な力の結集による地域コミュニティの維持・活性化</p> <p>特に、施策1「コミュニティを支える多様な主体の育成・活用」、施策2「暮らしやすく魅力的なコミュニティづくりの促進」に関連する意見</p>		<ul style="list-style-type: none"> 住民の学べる場づくりなど、コミュニティの参加や誰でも活用できるような配慮が必要。 博物館の魅力を伝える基礎となる研究機能が重要であり、研究機関として位置づけることが重要。 博物館の資料を研究対象として考えられるように、いろいろな方がアクセスしやすいようにすると、直接研究したり、山形での暮らしを考えたり、研究職を求めたりすることにも繋がる。 リアルだけでなくデジタルでもアクセスできるということが重要。様々な地域や世界、時代を超えてアクセスができる事が興味関心に繋がる。また、アクセスしやすいということをオープンにわかりやすく発信していくことが必要。 これからは横の連携が必要になる。博物館の目的に、教育、研究、楽しみなどがあり、これらは観光、移住に繋がっていく。 東北芸術工科大学の文化財保存修復学科など大学との連携を是非して欲しい。また、保存修復研究センターの活用は地域文化財を守っていくことにも役立つ。 博物館で全てを担うのではなく、県産業科学館など既にある施設と機能を分担する形もある。 地域、産業、自治体同士など、さまざまな立場の連携がある。何のために連携するのか、目的がはっきりしていないと連携のための連携になってしまいうまくいかない。
政策5: 総合的な少子化対策の新展開		
<p>政策6: 県民誰もが個性や能力を発揮し、活躍できる環境の整備</p> <p>特に、施策1「一人ひとりの多様な社会参加・就労の促進」、施策2「外国人の受入環境の整備」、施策3「多様な主体による社会的課題の解決に向けた取組みの促進」に関連する意見</p>		<ul style="list-style-type: none"> 住民の学べる場づくりなど、コミュニティの参加や誰でも活用できるような配慮が必要。 インクルーシブな視点が重要であり、誰にでも利用しやすい博物館を目指す必要がある。そのためには、施設面での問題と人間でケアできる問題を分けて検討する必要がある。 障がいやデザインの方で解決するインクルーシブな博物館、“見る”だけでなく“感じる”“触れる”博物館を目指してほしい。障がい者福祉にもつながる。 これからは横の連携が必要になる。博物館の目的に、教育、研究、楽しみなどがあり、これらは観光、移住に繋がっていく。 博物館で全てを担うのではなく、県産業科学館など既にある施設と機能を分担する形もある。 地域、産業、自治体同士など、さまざまな立場の連携がある。何のために連携するのか、目的がはっきりしていないと連携のための連携になってしまいうまくいかない。
政策の柱5: 未来に向けた発展基盤となる県土の整備・活用		
<p>政策1: 暮らしや産業の発展基盤となるICTなど未来技術の早期実装</p> <p>特に、施策1「ICTの積極的・効果的な活用による県民生活の質や地域産業の生産性の向上」に関連する意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> 山形県を一つの博物館ととらえ、各地域の小さな博物館や資料館等を横につなぐプラットフォームとなるのが、メインとなる県立博物館の役割である。 それぞれの地域の文化を継承するのが、それぞれの地域の博物館であり、それらをつなげるのが県立博物館の役割。 他の県立の施設との関係など既存の博物館との連携及び位置づけの整理が大事。 単に博物館資料をデジタル化するだけでなく、組織をデジタル化していかななくてはならない。地域の施設それぞれがフルスペックでデジタル化するのではなく、統一したデジタル化により横断的に結ぶなど組織横断的な動きが大きな課題であり、実現できれば効率化が進む。 	<ul style="list-style-type: none"> 様々な企画に挑戦できる実験場的な場所やプログラム、一回試しにやってみる機能があるとよいのではないか。それをデジタルで実現することもよい。 リアルだけでなくデジタルでもアクセスできるということが重要。様々な地域や世界、時代を超えてアクセスができる事が興味関心に繋がる。また、アクセスしやすいということをオープンにわかりやすく発信していくことが必要。
政策2: 国内外の活力を呼び込む多様で重層的な交通ネットワークの形成		
<p>政策3: 地域の豊かな自然と地球の環境を守る持続可能な地域づくり</p> <p>特に、施策1「自然環境や文化資産の保全・活用・継承」に関連する意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> 山形県の4地域は、それぞれ特性がある。各地の食文化、祈りの文化、民話、方言、自然、地形、最上川の歴史、樹氷など、山形にしかない、山形県ならではの文化、歴史、自然を、現代の生活につなげて紹介することで身近に感じ魅力になる。 資料を蓄積していくことにより何かを生み出していく学術的な専門家の視点が必要。 「普遍的な価値」があるものをブラッシュアップし、なぜそれが大事なのか、残していかなければいけないのか考えるきっかけをつくることにより、郷土への愛着につながる。 今にもなくなってしまうような文化がたくさんある。それらをリスト化し残していくことはとても大事なことです。 社会が変わっていく中で、博物館が収集している変わらないもの(リアル)に大きな価値が生まれる。変わらないものへの安心感が、人が集まるということに繋がるのではないか。 その土地の人々の暮らしと関連したもの、風土を作ってきたものには魅力があり、その魅力は観光誘客にもつながる。 博物館の内容だけではなく、交通政策、観光政策も含めた広い視点で考える必要がある。周辺の商業施設や地域企業との連携により経済効果を高めることが重要である。 例えば、食文化や歴史を紹介する展示企画と関連づけて、在来野菜を買ったり、郷土料理を食べられる施設があると、収蔵資料の理解が深まり、展示企画からの誘導もでき、集客につながる。 博物館の収益性が担保できることで、地域、子ども達、文化財の保存・修復にも還元できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 住民の学べる場づくりなど、コミュニティの参加や誰でも活用できるような配慮が必要。 博物館の魅力を伝える基礎となる研究機能が重要であり、研究機関として位置づけることが重要。 博物館の資料を研究対象として考えられるように、いろいろな方がアクセスしやすいようにすると、直接研究したり、山形での暮らしを考えたり、研究職を求めたりすることにも繋がる。 リアルだけでなくデジタルでもアクセスできるということが重要。様々な地域や世界、時代を超えてアクセスができる事が興味関心に繋がる。また、アクセスしやすいということをオープンにわかりやすく発信していくことが必要。 地形や地質の遺産を中心とした景観であるジオパークとの連携ができれば面白い。宮城県には、ジオパークである三陸の国立公園に震災の遺構があり、災害の啓発や防災に役立てることが出来る。
<p>政策4: 地域の特性を活かし暮らしを支える活力ある圏域の形成</p> <p>特に、施策1「魅力あるまちづくりの推進」、施策2「豊富な地域資源を活かした農山漁村地域の維持・活性化」、施策4「県を越えた広域連携の推進」に関連する意見</p>		
<p>政策5: 持続可能で効率的な社会資本の維持・管理の推進</p> <p>特に、施策2「社会システムを支える多様な主体との連携・協働」に関連する意見</p>		<ul style="list-style-type: none"> ファンの入口を掴むのが大事。寄附の窓口を作り、クラウドファンディングやボランティアなど、支えの仕組みを作る。支え手と博物館の関係性をどんどん濃くしていくのが良い。